

## 研究ノート

## コロナ禍でのローカルヒーロー活動

石 井 龍 太

## 要 旨

地域キャラクターの一類型であるローカルヒーローは、2019年冬から世界に広がったコロナ禍により大きな影響を被った。従来通りの活動が難しくなる中、新たな活動に挑戦した例もあった。本稿ではコロナ禍において試みられたローカルヒーローの挑戦を大きく3類型し、具体例を交えつつ概観する。またこうした実践例を参考にしつつ、城西大学経営学部石井ゼミが行った活動について報告する。

キーワード：ローカルヒーロー，コロナ禍

## 1. はじめに

## 1-1. いわゆる「コロナ禍」について

2019年冬から「新型コロナウイルス感染症」が世界的に流行した。人類史を紐解けば、未知の感染症と対峙する局面は幾度となくあったものの、医学の進歩した21世紀の現代にまさかこうした事態が発生するとは、少なくとも筆者にはさながら夢物語の様にも思える事態であった。各国、各地の医療インフラ、公衆衛生、さらには社会の仕組みが試されることとなり、感染を防げるか、感染者を救えるかという医学上の課題がまず浮上した。グローバル社会も見直しを迫られ、人の往来、接触が避けられた。経済の停滞は著しく、特に飲食店や観光業の廃業、規模縮小は身近に生じていた。筆者の周りでも、学生がアルバイト先を失う、就職内定が取り消される等、様々な事態が発生した。

そしてこうした事態に対する人々の意識、知識、協力して困難に対処する関係性も試されることにもなった。未知の感染症との戦いに留まらず、マスクや消毒薬の買占問題、罹患者・外国人・医療従事者への差別問題、さらには自粛の名の下にプライバシーに踏み込み他人の行動や生活を

拘束する等、人心の不安を背景とした社会の混乱も発生し、日本社会に内在していた多くの課題を浮き彫りにした事態だったと筆者は考える。ネット社会がこの状況に及ぼした影響について詳細に検討する力を筆者は持たないが、マスクの有効性やワクチン接種の可否について、または特定の国家や民族と結びつけた陰謀論など、SNS 上では現在も不可思議な議論が飛び交っている。

また地域社会で対面を前提として行われて来た催しも大きな打撃を被った。城西大学近隣では、著名な鶴ヶ島市脚折の雨乞行事が中止となっている。さらに 10、11 月を中心に多数開催されていた産業まつり、市民まつりは軒並み中止となり、2023 年まで数年に渡り開催されない祭事も多かった。

筆者の身近で生じた変化も広く多い。客観性に努める研究者も、こうした時流に影響を受けずにはいられない。筆者の専門とする歴史学においては、1 世紀以上前のスペイン風邪をはじめ、病は文字通り流行のテーマとなった。また上述した社会の混乱は、人類史に似た事例をいくつも見つけることが出来る。歴史に関する知識があれば、過去の感染症蔓延時や戦時、災害時に発生した事態が知られていれば、こうした混乱を少しでも緩和出来たかもしれない、そんな観測は決定的外れではないだろう。おそらく歴史学者にも出来ることはあったのである。

そして教育現場が被った影響は大きい。特に実技を伴うフィールドワークを要とする教育、研究活動が被ったダメージは大きく、どうするかは共通の課題となった。2020 年当初、学校における対面授業が全国的に見合されたことにより、それまで中々広がりを見せなかったオンライン授業が急速に普及した。一方で対面での出会いの場の喪失は、学生たちに幅広く影響したと言われる。緊急事態の名の下に抑制された対面对話は、その効果を定量化できるものでは無いにせよ、とても大切だったことを思い知らされた。ただ学生たちは一途に対面授業を望んでいた訳ではなく、オンライン授業の利便性にも敏感で、特に講義形式の授業を中心にむしろそちらを望む傾向があったことも良く記憶しておくべきであろう。学生たちの方が教員たちより適応が早かったのかもしれない。

加えて、2022 年 5 月からの新型コロナウイルス感染症の 5 類移行によって、世間から急速にコロナ禍にまつわる話題が消えて行ったこともよく記憶しておくべきであろう。厚生労働大臣からの通達には「国民の皆様の自主的な取組を基本とする対応に転換（厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策本部 2023）」とあることから、一人一人の責任は増大したと考えるべきだが、そうした緊張感より開放感が先立ったという雰囲気を筆者は感じている。コロナ禍の政治的、社会的側面について、様々な学問分野から研究され解明されていくことを期待する。

自身の体験を交えながら俯瞰した時、2019 年冬から 2022 年春までのいわゆる「コロナ禍」とは、未知の感染症との戦いという医学的問題だけでなく、社会のありとあらゆる立場の人間が関わりを持った、非常に幅広い社会現象だと雑駁にまとめられるだろう。現在でも、「コロナの時

は…」という枕詞が会話に時折登場する。この時期を過ごした世代間の経験を大まかに包括する便利な言葉として、またある種の戦友意識を掻き立てる言葉として、今後も使われていくのではないだろうか。

## 1-2. 「不要不急」

本稿の内容と関わる事柄として、コロナ禍でよく聞かれた言葉に「不要不急」がある。2021年の文科省の調査では「この言葉をそのまま使うのがいい」と回答した人が67.2%（文科省2021: 12）と高い割合となった語だが、実際にはそれほど自明な言葉ではなく、その意味や使い方において振れ幅が大きいことから、国会では「不要不急の外出・移動」についての質問が出されている（参議院2021）。今日では天候不良時などにも使われるものの、例えば「豪雪時には不要不急の外出を控える」といった用例は代替案やより効率の良い方法を模索する必要を促す意味で使われている。

しかしコロナ禍での「不要不急」は、ライブやカラオケといった対面の娯楽が感染源のひとつであったことを踏まえ、主として娯楽に対する批判的な意味合いを持って使われた用語であり、感染症対策の不備を責めるだけでなく、「非常時にも関わらず遊んでいる」という、「不謹慎」「不見識」な態度への批判の意味すら持っていたといえよう。2022年元日に西武そごうが出した広告には「気持ちが満たされる時間」が「不要不急と呼ばれ」たと記され（NHK NEWSWEB 2022）、コロナ禍におけるこの用語の意味付けがうかがえる。

こうした意味での「不要不急」の使用に対する反応はコロナ禍の初期から見られた。養老孟子氏は人生自体が不要不急だとし、この言葉への問いかけを朝日新聞に寄稿している（養老2020）。読売新聞はコロナ禍におけるバーの運営者の「ずっと世の中から必要がないと言われている僕ら」という自己形容を取り上げ、「「不要不急」という言葉に、職業への誇りを傷つけられた人がいる」と表現した（読売新聞2021）。しかしこうした反応やある種の同情はあったとしても、「コロナ禍」での日本社会全体のある種過激な雰囲気、議論を許さない自粛ムードが広がる中で、対面を前提として運営されていた娯楽の優先順位が上がることはなく、関連する産業の多くは打撃を受けることとなった。

筆者が専門のひとつとする地域キャラクターも例外ではなく、ほとんどの活動が中止となった。特にローカルヒーローは、ステージショーを主な活動の舞台とし、直接のふれあいを重視してきた（石井2014他）ことから、被った打撃は他の地域キャラクターコンテンツや、全国放送のテレビ番組で活躍するメジャーヒーローより大きかったといえるだろう。席を埋めつくす観客が押し合いへし合いしながら、声を枯らしてヒーローを応援するステージショーの在り方や、ヒーローと握手し触れ合うグリーティングは、感染症対策の観点からは確かに危険な行為である。また観

客間、キャラクターと観客間の感染リスクだけでなく、声を出しながら活劇の練習を行い、狭く締め切った控室で衣装に着替えるといった日々のキャスト・スタッフの行為が、彼ら彼女らの間での感染リスクも高めていたことは無視できない。リスクがあちこちに伴い「不要不急」の存在であるとされたローカルヒーローの活動は、コロナ禍の中で強く制約されることとなった。さらに数年間のブランクは人々の意識や活力、立場に影響し、現在もメンバーを集めて活動を再開することができない、あるいは低調なままの団体も存在しており、各地の伝統祭祀とも共通した課題を抱えることとなった。

一方で、こうした状況下で知恵を絞って活動したローカルヒーローも各地に存在した。詳細は後述するが、未経験の非常時にあって出来ることを見極め、ローカルヒーローが「不要不急」でないことを立証した活動といえよう。なお誤解を招かない様に付言しておく、多くの団体が採用した「活動自粛」は敬意を表すべき態度であると筆者は考える。立派な感染症対策であると共に、手塩にかけた活動を制限しなくてはならない無力感、やりきれなさに直面するという、大変な決意を要する選択であるといえよう。

## 2. 先行研究

### 2-1. ローカルヒーローに関する先行研究

ローカルヒーローに関する先行研究は豊富とは言えない。ローカルヒーローの性格については、新しい福祉活動とする見解（岩崎 2008）、安定した地域ブランドとして存続していく地域活性化のシンボルのひとつとする位置づけ（水野 2012）、地域文化とする捉え方（矢島 2013, 2014）がなされてきたが、実際には 1980 年代から 40 年に及ぶ歴史の中でかなり多様化していることが確認でき、ローカルヒーローを名乗る団体に共通した性質を見出すのは難しくなっている（石井 2014）。現在は全国で 200～250 団体が活動していると推察されるが、ローカルヒーローの定義が曖昧である（石井 2014）ことから、正確な把握は難しい。なおローカルヒーローの全体を網羅的に取り上げた図鑑が過去 2 回出版されている（ブルー・オレンジ・スタジアム 2006, ローカルヒーロー研究会 2013）他、毎年秋に開催され 100 を超えるキャラクターが参加する全国イベント「日本ローカルヒーロー祭」（千葉県千葉市）のパンフレットは、ローカルヒーローの現状を把握できる貴重な媒体となっている（ヤツルギ魂編 2015, 2016, 2017）。

一方で「ローカルヒーロー」コンテンツは有用なのか、どう運営したらよいのか、といった活用可能性については関心が広く、ショーに織り込まれたメッセージの重要性を高めていく付加価値のあり方とする指摘（金井, 高橋 2004: 242-244）がある他、ローカルヒーロー運営のビジネスモデルの実践例を述べたものや舞台裏を描いたもの（海老名 2009, うるの 2013, 山口 2013,

山本 2023 他) はここ 10 年余りの間コンスタントに出版されており、運営にまつわるノウハウや、作り手のドラマチックな苦労話への関心は継続しているともいえよう。筆者もこのテーマに関する論考を発表して来た。2015 年から城西大学でローカルヒーローを運営するゼミを立ち上げ、教育実践のひとつとして展開する中で、ローカルヒーローの運営には教育効果があり、特に団体運営に必要な協調性やコミュニケーション能力や、自分を磨く向上心が増大することが確認された(石井 2017)。

またローカルヒーローは多様化しているが、他のキャラクターコンテンツと比較すると一定の共通性も浮かび上がる。造形面では、硬質な力強い外観を持ち、逞しさ、憧れを掻き立てるデザインが多い。そして活動面では、活劇を伴うステージショーを重視する例が多い(石井 2014, 2015)。ステージ上でヒーローは戦い、傷つき、危機に陥りながら己の信念を貫き通す。そこで発信されるメッセージは、観客に強く訴えかけることになる(石井 2015)。ローカルヒーローの持つ強いメッセージ性については、今後よく留意して活用につなげていくべきであろう。

## 2-2. コロナ禍での伝統行事に関する先行研究

筆者はかつて、現代のローカルヒーロー活動と、伝統的な地域行事との近縁性について論じた(石井 2023) が、コロナ禍においてそれはさらに顕在化したと考えている。コロナ禍における伝統行事のあり方については多くの先行研究がある。佐々木裕道氏は、民俗行事の伝承を支えていたのは地域社会内部でのボランティア的な努力であり、コロナ禍によって民俗行事が受けている影響は地域の信仰や娯楽の否定、多様性の否定にほかならないとする。そして地域の人々が活力を得るといった価値観の根源的な部分が否定される状況は、無形民俗文化財の危機、地域社会の大きな危機であるとする(佐々木 2021: 21)。地域キャラクターの活動は、地域の活力に寄与するという点で伝統文化と目的を同じくしており、その活動が制限されることによる影響は、大きな差こそあれ、深刻なものであるといえるだろう。

また 2021 年 2, 3 月に行われた「海の祭りに関する調査(日本財団「海と日本プロジェクト」×一般社団法人マツリズム)」によれば、「今後祭りが開催されなくなると思いますか。」という質問に、「そう思う」4.5%、「ややそう思う」34.0%となり、また「「コロナ禍で失われる可能性が高いと思う日本文化を教えてください」という質問には 42.3%の回答者が「祭り」を挙げて 1 位となり、2 位は「花火大会」32.8%となった(一般社団法人マツリズム・日本財団「海と日本プロジェクト」2021)。祭りはいわば不要不急の代表例であり、コロナ禍後に衰退する予見がなされていたことがうかがえる。

実際にはこのアンケートの様にはならず、コロナ禍でも開催された祭事、一時中止を経て 2024 年現在は再開されている祭事も多いが、一定以上の変化を遂げた例もある。コロナ禍にお

ける仙台七夕まつりの事例を調査した安藤直子氏によれば、東北の夏祭りは観光客が各県を組み合わせて回ることを想定しながら観光商品化されてきたことから、2020年の開催は東北他県の動向を伺いつつ中止となったという。一方で地域商店街は淡々と例年通りの伝統七夕行事を継続し、それどころか観光七夕が中止されたことによって地域住民のための行事が失われることが危惧され、前年より多くの地域商店会で七夕飾りが提出されたという。児童館や市民センターもこれに呼応し、例年以上に力を入れた七夕飾りが作られ、それまで中心商店街の飾りを見るだけだった市民が自ら作って参加するようになったという。また中心商店街では2022年に3年ぶりに通常開催されるが、大型飾りはコロナ禍前の7割強となり、感染防止対策のためそれまでかき分けて歩く様に低く設置されていた吹き流しを2mの高さにする、食べ歩き禁止などの措置が取られたという。吹き流しを高く設置するという変更は、放火やいたずら防止のパトロールの手間を省力化し、また見晴らしがよくなって拾得物や迷子が減少するメリットが生まれ、定着する可能性があるという（安藤 2022: 25-35）。注目すべき事例といえよう。

### 3. 事例分析

ローカルヒーローは、ステージショーやグリーティング（ファンと触れ合う練り歩き）を重視し、他の地域キャラクターコンテンツと比してそれが大きな特徴となって来たが、それ故にコロナ禍において大きなダメージを被ることもなってしまった。得意分野での活動ができなくなったことで、ローカルヒーローは新しい取り組みを模索することとなった。

筆者は既に2020年の展示会『地域表象の仮面文化 ローカルヒーローの造形美』（城西大学水田美術館）にて、2020年から2022年までのいわゆるコロナ禍に対してローカルヒーローが行った試みを大きく3つの類型に分けて展示した。本稿でもこの3類型に則りつつ、限られた展示スペースでは言及し切れなかった細目を追加して論じる。

#### 3-1. 直接的な感染症対策を行う例

新型コロナウイルス感染症に関する対策を、ローカルヒーローというコンテンツの特色を生かして実践した例である。コロナ禍にあっては様々な対策が行われたが、蔓延を食い止めるための感染症対策に関する活動を行う例が目立った。ローカルヒーローはそれまでも防犯、防災、衛生、交通安全といった啓発活動を実施してきた経験蓄積があり、それを生かす形で展開された活動と見ることも出来るだろう。

具体的な活動例はさらに大きく2分される。ひとつは、キャラクターの映像を用いた媒体を作成する方法である。主な例としては、キャラクターを用いた啓発ポスターを作成する試みが複数

の団体で行われていた（図 1-1～2）。また PDF 化したチラシ・ポスターのデータを自身の HP 等からダウンロードできるようにして頒布する方法，ヒーローが語るという型式で衛生や生活に関する注意喚起を SNS で発信する活動も行われた。

もうひとつの活動例は，動画を作成しインターネット上で拡散するものである。衛生のために必要な行為をキャラクターが説明する，という内容の動画を作成する活動が多い。同様の試みはローカルヒーローに留まらず，大手メジャーヒーローや子供向け作品のキャラクターにおいても試みられていた。

さらに両活動例の発展型として，オンデマンド出版の絵本を制作する例も見られた。福岡県博多市で活動する『博神バリスガー』は，絵本『～みらいをつなぐえがおのおてあらい～ てあらいヒーロー』を作成した。表題の通り，内容は感染予防のための衛生啓発となっており，ヒーローが手袋を外して素肌を晒し，手洗いするシュールな展開となっている。またコロナ禍でブームとなった妖怪アマビエが，キャラクターにアレンジされて登場する。団体の HP において PDF を



図 1 直接的な感染症対策を行う例

- 1, 『陶神オリバー』ポスター      2, 『安芸戦士メブルカイザー』ポスター  
3, 4 『博神バリスガー』衛生啓発絵本『～みらいをつなぐえがおのおてあらい～ てあらいヒーロー』

無償提供する他、Amazon からは印刷版を購入できる仕様となっている。団体は福岡県内 60 カ所の県立、市立図書館へこの絵本を寄贈したという（図 1-3, 4『博神バリスガー』HP）。

### 3-2. 在宅生活を支援する例

コロナ禍の広がり始めた 2020 年当初から、子供たちの在宅時間が増える事態が広く発生した。全国で学校が休校となり、また子供達にも外出の自粛が求められ、2021 年になってからも公園の遊具がテープ止めされて利用できなくされる等の動きも見られた。こうした状況下で、在宅で過ごす時間を退屈しない様、楽しみを提供する活動もローカルヒーローの間で広く行われた。

実践例のひとつが動画の公開である。実際のヒーローショーが実施できない中で、過去のショーの動画を YouTube などに公開する例は多く見られた。あるいはローカルヒーローを運営する企業が、地方局等で放送していた映像作品を無料配信する例もあった。同様の活動は大手テレビ番組のメジャーヒーローでも行われた。映像作品を有償商品として扱う企業の中にはその後配信を停止したところもあったが、中にはそのまま公開を継続する団体もあり、結果として過去の活動のアーカイブ化と普及が進行することとなった。それまでもローカルヒーローが自身の作成した映像作品や過去のステージショーの動画をインターネット上で公開する例は広く見られたが、コロナ禍でさらに進行したといえるだろう。教育現場や職場がオンライン化していく状況とも重なり、興味深い現象である。

またコロナ禍において新たな動画作品を作成する例もあった。栃木県のヒーロー『精霊法師トチノキッド』が主催した「ローカルヒーローネタリレー」（2020 年 4 月）は、ローカルヒーロー達が笑えるネタを投稿し次々とつないでいくという内容で、コロナ禍でのヒーロー活動として注目され、新聞報道される等話題を呼んだ（図 2-1）。また清掃活動を主たる活動として来た「リアルライフヒーロー」の団体『NEXUS FOREVER』の呼びかけにより、ローカルヒーローを含む様々なキャラクターが人々へのエールを送る「コロナに負けるな！頑張ろう日本!!～応援メッセージ動画」（2020 年 4～5 月）を製作する試みも行われ、詳細は後述するが石井ゼミも参加した（図 5-3, 4）。同様の試みは大手の映画製作に係るスタッフやクリエイターも展開していたが、管見の限りローカルヒーローの動きの方が早かった様だ。なお上述した感染症対策をヒーローが説明する動画は、こちらの分類にも当てはめられよう。

動画配信以外の在宅生活の支援活動としては、塗り絵やペーパークラフトを作成し、Twitter（現 X）等を通じて無料頒布するという活動も行われた（図 2-2～5）。ローカルヒーローの運営団体が直接作成する例もあれば、作画を得意とするファンが団体の了承を得て作成し拡散する例も見られた。秋田のローカルヒーロー『超人ネイガー』はお面のペーパークラフトのデータを無償提供しており、完成度は元より、解説が秋田方言になっている等ローカルヒーローならではの

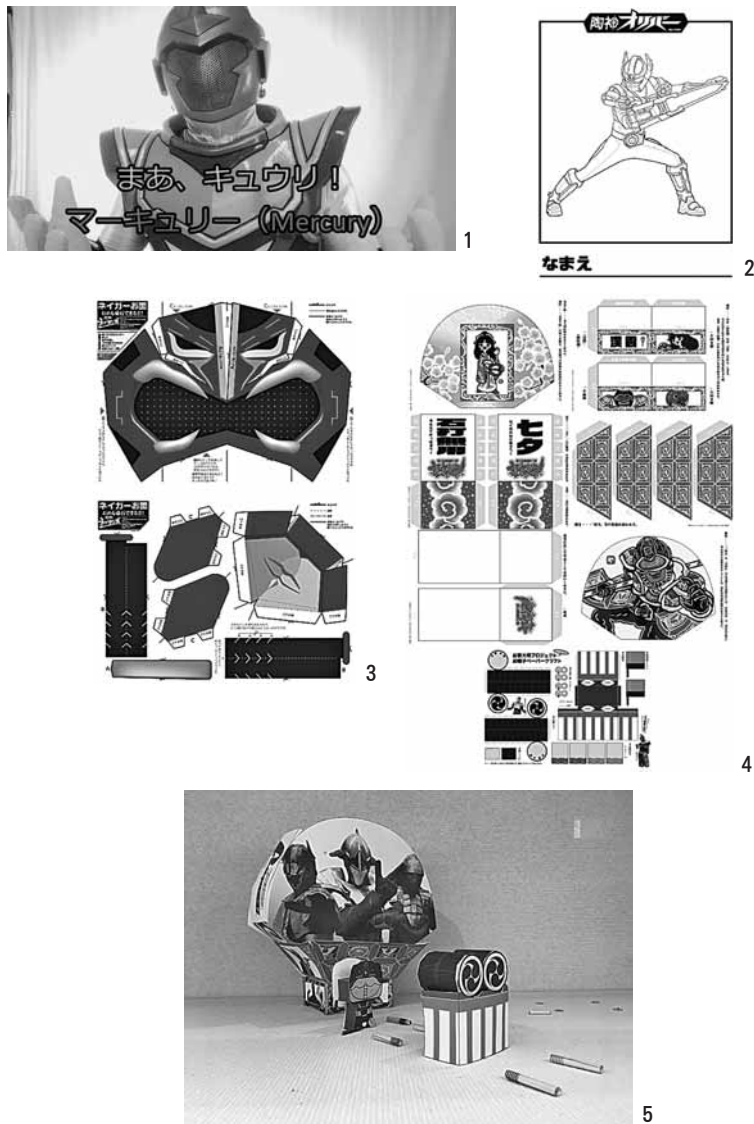


図2 在宅生活を支援する例

- 1、『精霊法師トチノキッド』主催の動画『ローカルヒーローネタリレー』
- 2、『陶神オリバー』塗り絵
- 3、『超人ネイガー』ペーパークラフト
- 4、『お祭り大将ヤーヤドン』ねぶたペーパークラフト
- 5、石井ゼミの画像を用いて製作した『お祭り大将ヤーヤドン』ねぶたペーパークラフト  
(※写真中の人形は ac045 氏作による「つくってあそぼう！ Local hero Paper craft」)

趣向が凝らされている（図2-3）。またペーパークラフトの中には、パーツ数が多いもの、立体感溢れる高度なもの、さらに利用者がアレンジを加えられるものも登場し、純粋な子供向けではなく保護者はじめ高年齢層も対象にする意図もあったと推察される。『お祭り大将ヤーヤドン』

によるねぶたのペーパークラフト（図2-4, 5）は、ねぶた本体だけでなく細かな太鼓をはじめ多くの小道具が再現できる仕様となっており、筆者もゼミ生たちと製作したところかなりの時間を要し、在宅支援としては十分なものであった。さらに自身の写真やイラストを入れ込んでオリジナルねぶたを作成することもできる内容となっていた（図2-5）。なお青森ねぶた祭は2020年、21年はコロナ禍のため中止され、2022年に限定的開催、23年からコロナ禍以前と同内容に戻しており（朝日新聞デジタル2023）、伝統的地域文化を代替する試みでもあったことがうかがえる。

動画配信も、ペーパークラフトの提供も、SNSを活用した活動という側面を持っている。特に後者はアナログな手作業を要するものだが、元のデータを入手するにはインターネットを利用する必要がある点で極めて現代的ともいえる。今日の地域キャラクターコンテンツの隆盛は、世界的な発信力を持つツールを誰でも無料で手に入れることが出来るSNS社会の広がりと同関係ではない。コロナ禍での活動にも、地域キャラクターとSNSの強い結びつきを見ることが出来る。

### 3-3. 工夫を凝らしてステージ・グリーティング活動を実施する例

コロナ禍以前のキャラクターショーは、狭く締め切った控室でキャスト・スタッフが準備し、客席にパーテーションや間隔等の措置は取られず、司会は観客に大声で応援することを求める、といった型式で行われる例が多かった。感染症対策はほぼ行われていなかったと言ってよい。コロナ禍が始まり、強力な自粛ムードが広がる中で、集合して開催される娯楽である上に感染症対策がなされないステージショーは「不要不急」とされ、実現は難しくなった。ショッピングモールの小劇場でもキャラクターショーは消え、イベント業界に与えた影響は計り知れない。特にステージショーを重視してきたローカルヒーローにとってこれは痛手であった。

そこで工夫を加え、感染症対策を講じたステージショーを試みる例が2020年中に早くも開始されていた。ステージショーは屋内・屋外いずれも行われていたが、屋外の実施に限定し、更に控室を交替で使用する等、スタッフ間の感染を防ぐ安全対策も講じられる様になった。また客席に間隔を空けるよう促し、実際にテープで仕切り線を引く例、休憩時間に客席を消毒する実践例もあった（図3-1）。また多くの団体で実施されていたヒーローへの応援呼びかけはなされず、それどころか観客には声援を挙げて応援しないことを求め、声援の代わりになるものとしてタンバリンやベル、マラカスといった楽器を配布する工夫が行われた（図3-2）。当然これら配布される楽器を消毒する手間も発生することとなる。ステージと客席の間に飛沫防止用の透明幕を張る実践例もあった。

ステージショーだけでなく、ローカルヒーローの大きな活動のひとつであったグリーティング（練り歩き）も工夫を求められた。ショーの後にしばしば実施されていた握手撮影会は無くなり、



図3 工夫を凝らしてステージ・グリーティング活動を実施する例

- 1, 仕切り線のある客席の消毒  
(2021年4月18日 株式会社L4「東日本大震災10年目の復興チャリティー2021」)
- 2, ショー応援用の楽器貸出  
(2020年11月14, 15日 株式会社ヤツルギ魂「2020日本ローカルヒーロー祭」)
- 3, イベント時のガイドライン  
(2020年11月14, 15日 株式会社ヤツルギ魂「2020日本ローカルヒーロー祭」)

握手をしない、透明パーテーション越しにチェキ撮影を行う、チラシなどの頒布はキャラクター側から積極的に提供しないといったルールを設定する試みも行われた(図3-3)。

一方で、オンライン技術を応用し、無観客でのオンラインショーを開催する例もあった。『地域戦隊カッセイカマン』が主催し、長野県下條村で毎年開催されていた老舗のローカルヒーローコラボイベントは、2021年は『おうちと地元で楽しむローカルヒーロー大放送!』と題してオンライン化を図り、参加団体が作成した動画をYouTubeと地元ケーブルテレビで放送する手法を取って開催された(地域戦隊カッセイカマン2021)。

観客を入れて限定的に実施したステージショーでも、オンライン配信と併用する例もあった。

客席における感染症対策から入場制限を設けざるを得なかったことも背景にあるだろう。飯能を拠点とする株式会社L4が継続的に開催しているチャリティーイベントは、2021年には有料開催として来場者を限定、特定し、さらに対面とオンライン配信の両手法を併用し、それぞれ異なる代金設定で開催された。オンラインでは実際のステージショーを同時配信する手法で行われた。ここにも、SNS活用の経験蓄積があるローカルヒーローの強みが発揮されることとなった。

### 3-4. 城西大学経営学部石井ゼミの活動

城西大学経営学部石井ゼミは、ローカルヒーローの研究と実践をテーマに、2015年来活動して来た。しかしコロナ禍の広がりに伴い、活動内容を大幅に変更修正せざるを得ない状況に陥る。スポーツや理科実験といった実技を要する授業科目は全国で様々な工夫が行われたが、このゼミの活動を維持するためにも他団体の実践例の情報収集とゼミの置かれた状況を把握した上での努力が必要となった。

従来の活動が実施できなくなる中、大学の専門智、大学施設、さらにローカルヒーローというコンテンツを生かして出来ることを検討し、上述した3種の実践全てをゼミ生達と共に行った。その結果、2019年以前と同数の活動実績を挙げる事が出来た。上述の3種別ごとに紹介する。

#### ① 直接的な感染症対策を行う例

2020年3月に、石井ゼミでは「無いよりマシ作戦」と題した活動を実施した。啓発カードと手作りマスクのサンプルを作成し、大学近郊の人通りが多い場所で配布するという活動となった。

最初に着手したのは、コロナ禍において気を付けるべきことをまとめた配布用カード（図4-1～3）の作成である。「衛生啓発キャラカード」と題したはがきサイズのカードをデザインし、表面には上半に基礎的な衛生管理として「てあらい」「せきエチケット」「やすむ」の3項目とそれぞれの簡単な説明を記載した。子供でも理解できるように、重要な部分は全てひらがな表記とルビを振ってある。また上半右側には当時石井ゼミで運営していた主役ヒーロー『リヴェイザーJ』の写真があしらわれた。リヴェイザーJはコロナ禍によりステージ活動が2回しかできなかった不遇のヒーローで、コロナ禍の被害者でもあり、コロナ禍との戦いにシフトすることになった象徴的なヒーローともなった。ヒーローからの語りは強いインパクトを持つという、キャラクターコンテンツの運営をする中で得られた経験を踏まえたデザインを心がけた。

カード表面の下半には、コロナ禍におけるあるべきコミュニケーションの必要性を啓発する内容を記載した。作成に当たっては地域医療を専門とする伊関友伸氏（城西大学経営学部教授）の監修を受けつつ、当時厚生省等の専門機関がHPで公開していた情報に拠って作成した。記載情報の出典はQRコードによって示した。なおコロナ禍が推移する中で呼びかけるべき情報に変化

が生じたため、伊関教授のご助言を受けて4月にはVer.2を作成した(図4-3)。上半が修正され、「くうきのいれかえ」を追加して4項目となっている。

そしてカード裏面には、品薄状態が続いていたマスクを手作りする方法を掲載した(図4-2)。上述した4項目の内「せきエチケット」にはマスクが有効だが、コロナ禍の発生当初から消毒薬と共にマスクの品薄と買占めが大きな問題となっていた。そうした中で、手作りマスク作りはその後小さなブームとなり、裁縫品店やホームセンターでは専用コーナーまで設けられていく。製作技法や素材には様々なものがあったが、筆者はNHKが公開していたキッチンペーパーと輪ゴムで製作できる代替マスク(『NHK』HP)を参照し、作り方を写真でまとめた。市販品には及ばないものの、まさしく「無いよりマシ」な代用品であることも付記した。

さらに手作りマスクのサンプルを作って衛生啓発キャラカードと共に頒布し、市販マスクが無い時に使ってもらうことも、実物を見て自分で作ることもできるようにする活動を計画した。ゼミ生たちに声をかけたところ、春休み期間中ながら3、4年生のほとんどと2年生の一部学生が参加してくれることとなった。中には下宿先を引き払ってしまったため、わざわざ栃木の実家から自家用車で来てくれた4年生もいた。また参加の是非に迷って家族に相談したところ、素晴らしい活動だから是非行くようにと言われ送り出されて来たという学生もいた。

城西大学諸機関の支援を頂いて、学内に制作場所を確保し、学生たちとマスクを作る日々が続いた(図4-4, 5)。マスク作りにはなるべく広い教室を確保した上で、予め検温・体調チェックを行った学生たちと共に、間隔を空けて着席し、換気し、座席を消毒し、厚生労働省の指針に従って念入りの手洗いを行った上で手袋、帽子、白衣を身に着けて実施した。結果として、衛生啓発活動を行いつつ、学生達の衛生感や知識も向上するという教育効果も認められた。作ったマスクは「勝利のV」の形に折って個包装し、キャラクターが印刷された説明書きを印刷したシールで封をした(図4-6)。学生たちとの3日間の努力で、3月6日までに500枚以上の手作りマスクサンプルを生産した。

配布活動は城西大学近郊の坂戸市、毛呂山町、鶴ヶ島市、川越市の4市町村で実施した。カードと手作りマスクのサンプルをセットにして、人通りの多い場所で配布するという計画だった。活動場所の確保も簡単ではなかったが、城西大学で地域活動をされている多くの教職員の方々からご協力頂き、実現にこぎつけることが出来た。

最初の活動は2020年3月7日15時から、城西大学の施設である北坂戸駅前の「城西大学北坂戸にぎわいサロン」前となった(図4-7, 8)。人が集まり過ぎるのも良くないと判断し、事前告知は地域のみとし、会場の「にぎわいサロン」に貼紙を出す程度にとどめた。学生は4名が参加し、交替で2人ずつがキャラクターに、もう2人は白衣、手袋、そして自分達が作った手作りマスクで活動した。3月、4月に中止となったイベントのために準備してきた新キャラクター3





7



8



9



10



11



12



13



14

体は、この頒布活動が最初のお披露目となった。これまでのイベントでは醍醐味のひとつであったキャラクターとの握手は、感染を広げる危険があるのでこちらから断らざるを得なかったが、適切な距離を保った上での写真撮影は奨励することとした。2時間程度の活動だったが、その日に持ち込んだカードとマスクサンプル約300セットは、配布中に取り落としたものを除き全て配布することが出来た。

その後、4月頭までに総計4回の活動を実施した。第2回以降は関係者のご尽力を得つつ、大学施設以外のなるべく人通りの多い場所での活動を行うべく、市町村役場や警察等の関係各所と調整してご許可頂き実施した（図4-9～11）。各回の場所、日時、配布したカードとマスクサンプルのセット数は以下の通りである（表1）。第3、4回の際には城西大学の卒業生も活動場所の確保に尽力下さった。また第3回の開催場所である丸広百貨店川越店と城西大学は協定を結んでいたご縁があったことで活動にご理解頂き、通りに面した軒先で実施した。

表1 「無いよりマシ作戦」の実施日時、場所、  
衛生啓発キャラカード・手作りマスクの配布セット数

|     | 日 時                    | 場 所                 | 配布セット数               |
|-----|------------------------|---------------------|----------------------|
| 第1回 | 2020年3月7日 15:00～17:00  | 城西大学北坂戸にぎわいサロン（坂戸市） | 293セット               |
| 第2回 | 2020年3月23日 16:00～17:00 | 東武東上線若葉駅前（鶴ヶ島市）     | 301セット               |
| 第3回 | 2020年3月29日 11:30～12:15 | 丸広百貨店川越店前（川越市）      | 294セット               |
| 第4回 | 2020年4月4日 10:00～12:00  | 東武越生線武州長瀬駅前（毛呂山町）   | 午前139セット<br>午後142セット |

※衛生啓発キャラカードは、第1～3回はVer.1、第4回はVer.2を配布した。

当初懸念していたクレームも最後までなく、街の人々は好意的で、写真を撮ってくれた親子も何組もあった。また参加学生の体調は継続して確認したが問題はなかった。

活動の概要は大学HPにて公開した（石井2020a, 2020b）他に、これまでゼミ活動の広報を載せて来た石井のTwitter（現X）に投稿した。マスコミ向けの発表は特に用意しなかったものの、最初の活動を坂戸市の広報が取り上げて下さったのを皮切りに、テレビ埼玉（4月3日「ニュース545」、4月4日「ウィークエンドニュースサタデー」）、ゆずの里ケーブルテレビ、読売新聞で報道されることとなった（丸広百貨店は3月20日にプレスリリースを出している）。学生もインタビューを受けることとなり、カメラの前で緊張しきりの中、「カッコいいヒーローの見せ方はステージショーだけではない」というコメントが自然と学生の口から出て来たのは喜ばしいことであった。

また「衛生啓発カード」のヒーロー部分を無地にした書式を用意し、石井ゼミのヒーロー『リヴァイザーJ』のHPからPDFとパワーポイントファイルで無料頒布できるようにし、全国の

様々なヒーローに参加を呼びかけたところ、30を超える団体にご参加頂いた。ローカルヒーローだけでなく、清掃等の社会貢献活動をされている「リアルライフヒーロー」からも多くのご参加を頂いた。それぞれの団体活動で頒布頂いた他、後述する城西大学水田美術館での展示会でパネル展示した（図 7-6）。

## ② 在宅生活を支援する例

石井ゼミは開講当初から、実施したステージショーの動画を YouTube で公開して来たため、コロナ禍において過去のステージ動画を新たに公開するといった活動は無かった。一方で、地域の祭事が次々と中止になり新たなステージ活動ができなくなったことを踏まえ、感染症対策を行いつつオンラインでの公開を前提とした動画制作を行った。ステージ用に執筆したシナリオを用い、主として構内で活劇する様子を撮影した動画は、2020～21 年にかけて計 3 本を数える（城西大学経営学部石井ゼミ 2020a, b, 2021a）。

そして衛生啓発を行う動画も 2 本作製し、時に活劇を交えつつ、石井ゼミのキャラクターが感染症対策を解説する内容のものとなった（図 5-1, 2）。SNS 動画の特徴を意識して短時間の動画となっている（城西大学経営学部石井ゼミ 2020c, d）。また上述した全国のキャラクター達による呼びかけ動画「コロナに負けない絆の力～応援メッセージ動画！コロナに負けるな！頑張ろう日本！！～リアルライフヒーロー，ローカルヒーロー，ゆるキャラ大集合！！」（2020 年 4～5 月）にも参加し、現役のヒーローだけでなく、2016 年に卒業した石井ゼミ第 1 期生のヒーローも呼びかけに応じて登壇した（図 5-3, 4 スラちゃんねる ASSEMBLE～リアルライフヒーロー 2020）。

加えて、例年実施されて来たオープンキャンパスの対面実施が難しくなり、オンライン開催を余儀なくされていた。そこで実際にキャンパスを訪れることが出来ない受験生に向けて、キャラクターを用いた施設紹介動画を製作した。経営学部が主として利用する 17 号館内を、キャラクター達が活劇しながら巡る内容で、2020 年に 4 年生のキャラクターによるロングバージョン（図 5-5 城西大学経営学部石井ゼミ 2020e, f, g, h, i, j）を、2020 年に石井ゼミへ進学した 3 年生によるショートバージョン（図 5-6 城西大学経営学部石井ゼミ 2020k）を製作した。

こうしたオンライン活動の効果を検証するのは難しいところだが、各動画の再生回数は 100～1400 回程度となっており、対面で実施したステージショーの観客数をやや上回る。また学生たちの活動の場を作り、その後対面での実施が可能になった際にスムーズに移行出来たのは成果のひとつといえよう。



図5 石井ゼミによる在宅生活を支援する例

- 1, 衛生啓発動画「4つのきほんをぶきにしろ」①
- 2, 衛生啓発動画「4つのきほんをぶきにしろ」②
- 3～5, 「コロナに負けるな！頑張ろう日本!!」への参加
- 6, 7, 「17号館施設紹介動画」(6, ロングバージョン 7, ショートバージョン)

### ③ 工夫を凝らしてステージ・グリーティング活動を実施する例

コロナ禍が及ぼした大きな影響のひとつに、地域コミュニティへの深刻なダメージが挙げられよう。伝統祭祀の中にはコロナ禍に中断を余儀なくされたことで、現在も復活がままならない状態になっている例も聞く。

それまでの対面型式でのヒーローショーが難しい中で、石井ゼミは大きく2つのショー活動を実施した。ひとつは、オンライン型式でショーを同時配信するという試みである。最初の試みは、11月29日開催の『インカレオンラインイベント「Beyond～ニューノーマル時代の Well-being を創造する～」』において実施した(図6-1)。このイベントは、関西学院大学国際学部木本圭一ゼミ、城西大学経営学部石井龍太ゼミ、東京医療保健大学医療情報学科今泉一哉ゼミ、東北福祉大学健康科学部河村孝幸ゼミ、目白大学メディア学部平山秀昭ゼミの5つの大学のゼミが集合し、オンライン会議アプリのひとつ Zoom と YouTube を連動させ、それぞれのゼミ活動を配信し視聴し合うといった画期的な試みであった(目白大学メディア学部平山ゼミ 2020)。学生たちは

Zoom 会議を繰り返して内容を詰め、13:00~17:40 ごろまでのイベントを運営した。

城西大学経営学部石井ゼミは4年生と3年生それぞれによる2本のヒーローショーを実施した。3年生にとってはこれが初めてのショーとなった。実際に配信された映像を見ると上述した自主製作映画と大きな差が無いが、実際の運営はショーの中継という体裁をとり、そのため、自主製作映画の様な撮り直しは一切できない、対面のショーと同様の緊張した状況下で収録された。映像は、カメラ担当の学生がZoomを立ち上げたiPadで撮影した。ショーで用いる音楽やセリフは、対面のステージショーと同じように予め録音し編集した音源データを流し、演者はそれを聞きながら演技する「完パケ（完全パッケージ）」という方法を用いたが、Zoomで音源データを共有してしまうとクリアに流れる反面、映像と音にタイムラグが発生する懸念があったため、この時はスピーカーを抱えたスタッフが映り込まない様にカメラマンの後ろからついて行き、映像と音を直接Zoomに流す手法を用いた。音ズレは生じなかったものの、これはスタッフの負担が極めて大きかった。また一般のステージショーでは難しい、場所を移動しながら展開するという内容で実施したため、事前の調査にもかかわらず、場所によってはネット回線が弱まる、収音が不十分で音量が小さくなるという問題点が生じ、オンライン配信の難しさを思い知ることとなった。

ただこの時の経験はその後大いに生かされた。2021年には人数を限定しつつ城西大学のオープンキャンパスが再開されたが、この時のノウハウを生かして会場となる複数の教室のスクリーンとYouTubeに、別の場所で行われているヒーローショーをZoomによって配信する手法を採用した（図6-2 城西大学経営学部石井ゼミ 2021c, d, e, f, g, h,）。)

また2020年9月には、『海と日本プロジェクト 秋の海ごみゼロ WEEK HERO ゴミ拾い』に参加した（図6-3~5）。江の島海水浴場において、一般参加者と共にヒーロー達も実際の清掃活動に参加するイベントで、2020年度に製作した石井ゼミのヒーロー『リジェネイダーJ』はステージ実施の目途が中々立たない中、この清掃活動が初めての野外活動となった。

2021年秋にはステージショーの実施は可能になったが、コロナ禍の余波は残り、地域の祭事は中々再開されない状況が続いた。そこで自らステージの場を作り出すため、大学の施設「北坂戸にぎわいサロン」を用いて自主イベントを開催する様になった。地元坂戸市のヒーロー「暗黒魔戦士クロウリー」や、日本工業大学の「NIT マン MECRIA」も参加したコラボイベントとなった。参加者の健康チェックと共に、来場者に対しては入口での検温、消毒を徹底し、さらに座席の間隔を空ける、意識的に換気を行うといった対応を取った。心苦しいことに声援を送るのは遠慮するようアナウンスせざるを得なかったが、受付で楽器類を配布して声援の代わりにしてもらえるように申し伝えた。握手会は見送り、しかし間隔を空けての写真撮影は積極的に推奨した（図6-6, 7）。



図6 石井ゼミによる工夫を凝らしてステージ・グリーティング活動を実施する例

- 1, 「インカレオンラインイベント」での配信ショー  
(2020年11月29日 ※写真手前の学生が持つipadで配信)」
- 2, 城西大学オープンキャンパスでの配信ショー  
(2021年5月23日 ※写真手前のPCで配信)
- 3～5, 『海と日本プロジェクト 秋の海ごみゼロ WEEK HERO ゴミ拾い』(2020年9月19日)
- 6～7, 城西大学北坂戸にぎわいサロンでの自主イベント(2021年12月3日)

#### ④ その他

##### 城西大学水田美術館における展示活動

こうした活動の他、キャラクターを活用した地域活動として行ったのが展示である。

ひとつは、2020年冬に開催した城西大学水田美術館における展示『地域表象の仮面文化 ロー

カルヒーローの造形美』(図 7-1~7)である。各地の博物館、美術館も、コロナ禍において開館できない状態が続いていたが、2020 年 12 月から期間と来場者数を絞って限定的に開館することとなった。そこで各地のローカルヒーローに打診し、石井ゼミのヒーローと共に可動式マネキン



図 7 城西大学水田美術館における展示活動

- 1, 「地域表象の仮面文化」展示作業風景
- 2~7, 「地域表象の仮面文化」展示風景 (2020 年 12 月 7 日~18 日)
- 8, 『地域連携活動』展示風景 (2021 年 7 月 10 日)

に着せてポーズを取らせた着ぐるみの展示を実施した。石井ゼミと同じく、ステージショーや練り歩きといった活動を自粛している団体が多く、スケジュールが空いている着ぐるみの活躍の場を提供することにもつながった。展示の設営は石井ゼミの学生たちが担当し、筆者のこれまでの研究内容を反映し、全国のローカルヒーローを4類型すると共に、ローカルヒーローの造形には地域の要素をはじめ活動団体の意図が良く反映されていることを示す展示構成を作った。またコロナ禍において行われていたローカルヒーロー活動についてもまとめて展示し、本稿の骨子となっている。上述した3類型の中では、「③工夫を凝らしてステージ・グリーティング活動を実施する例」に近いといえよう。

美術館におけるキャラクター展示は、その後2021年7月の『地域連携活動』展でも実施した(図7-8)。先の経験が大いに活かされることとなった。

#### ショッピングモール・デパートにおける展示活動

もうひとつの展示活動は、マネキンに着ぐるみを着せて人通りの多い個所に立たせるという展示活動である。最初の実践は、東武東上線若葉駅前に位置するショッピングモール「ワカバウォーク」にて2021年3月29日～4月4日に行った(図8-1, 2)。ここには屋根のある屋外催事スペースがあり、キャラクターショーをはじめ多くのイベントが行われているが、コロナ禍が広まる中でイベント開催が難しくなった。元々地域貢献活動に協力頂いていたこともあり、石井ゼミのキャラクター『高麗戦士トライ』の展示を提案した。更に「無いよりマシ作戦」で作成した「衛生啓発キャラカード」を大判印刷したパネルを並べ、キャラクターで関心を引きつつ衛生啓発を行うという活動となった。原則毎日の状態チェックは運営側として大変だったものの、生活用品を購入しに来る方が多い場所であったことから関心が薄れない工夫が必要となり、3月30日には背景に過去のショーの写真を展示した。また静的な展示に落とし込みつつヒーローという動的存在の特徴を活かすことを考え、4月2日からヒーローのポーズを変更した。これには一定の効果があって、「あ、ポーズが違う!!」と子供が大騒ぎする家族連れに行き会い、ニヤリとさせられることもあった。また活動に関心を持って頂いたJ:COMテレビがニュース番組『ジモト応援! 埼玉つながるNEWS～川越～』にて取り上げて下さった。内容について上述した「①直接的な感染症対策を行う例」に近いが、美術館展示でのノウハウが活かされた点でいずれとも重複する活動となった。

同様の活動は、コロナ禍が尾を引く2022年2月27日～3月6日にも実施し、当時石井ゼミの4年生が運営していたヒーローシリーズ『リジェネイダーJ』のキャラクターを、衛生啓発パネルと共に展示した(図8-3, 4)。『リジェネイダーJ』は上述したオンライン配信ショーを含め、立ち上げからコロナ禍の中で苦勞したヒーローシリーズでもあり、その最後の活躍の場として展



図8 衛生啓発展示の様子

- 1, 2, ワカバウォークでの『高麗戦士トライ衛生啓発展示』  
(1, 2021年4月1日 2, 2021年4月2日)
- 3, 4, ワカバウォークでの『リジェネイターJ衛生啓発展示』  
(3, 2022年3月5日 4, 2022年2月27日)
- 5, アトレマルヒロでの『高麗戦士トライ衛生啓発展示』(2022年4月29日)

示活動を実施した。着ぐるみとパネルを展示する内容は同様だが、これまでの経験を踏まえ、見回りついでに毎日のポーズ変更と、2日おきのキャラクターの交替も行った。

また2022年4月29日～5月5日には、川越駅前の「アトレマルヒロ」2階において『高麗戦士トライ』と衛生啓発パネルの展示を行った(図8-5)。これはデパートの地域貢献活動として、

また近隣大学との連携活動として行われた「ゴールデンウィーク SPECIAL EVENT」の一環として、「ローカルヒーロー “高麗戦士トライ” 衛生啓発展示会」のタイトルで行われたものであった。城西大学からは薬学部も参加し、特設会場でイベントを実施した。「アトレマルヒロ」には上述した衛生啓発活動でもご協力いただき、いずれも城西大学卒業生の方にお世話になったこと、謝して付言しておきたい。

#### 4. 考 察

以上、コロナ禍におけるローカルヒーロー活動について、全体の活動を概観しつつ、ゼミ内で実践した内容を紹介、分析した。これを踏まえ、実践した内容と課題について若干の考察を試みる。

コロナ禍での教育活動として石井ゼミの活動を見た場合、地域キャラクターコンテンツを運営することで教育効果を得ようとするならば、やはり活動を自粛するよりは工夫して継続することこそ意味があったと考える。自粛ムード漂う中で、屋外に出て行われた「無いよりマシ作戦」が批判を受けることは最後までなく、地域に鷹揚に受容頂いたものと考えている。今後とも「不要不急」と切り捨てられることなく、危機的状況化でも活動や存在の意義を発揮できる方法を考えていく必要があるだろう。

そして一連の活動には、参加した学生たちが感染症、衛生対策に対する知識を実践的に得、自分たちで作ったコンテンツによって地域に貢献できるという体験を得たことで生まれる教育的価値に期待していた。実際にそうした効果はあったものと考えるが、学生たちにとっては異なる捉えられ方がなされていた様だ。石井ゼミでは卒業時に、2年間のゼミ活動に関するアンケートを実施して来た。コロナ禍を経験し、「無いよりマシ作戦」の中核となった2018～19年度ゼミ生14名のアンケートを見ると、一連の活動を評価する声は僅か2名に留まった。むしろ2019年度中に実施出来た大規模な対面活動を懐かしみ、ステージ活動が少なく、特に2019年度に継続できなかったことを悲しむ声の方が目立った。学生たちにとっては、期待していた活動の代替と捉えられていたと考えられ、これは担当教員である筆者が、授業内でその活動意義の説明をし足りなかったことの表れと見て反省すべき点である。

石井ゼミの活動は大学の授業としての活動であった。他の授業と同じように、石井ゼミもまた学校に登校して対面で授業を行うことを当たり前の前提として2015年の立ち上げから組み上げられて来た。しかしこうした教育の在り方は、その当たり前をひっくり返すコロナ禍の広がりの中で改変を迫られ、急浮上したオンライン化の必須化とその内容改善の模索は生々しい記憶として残っている。筆者も対面とオンラインを併用した授業型式の方法論を模索したことがある（石

井 2020)。

一方で今現在の教育現場を見回した時、果たしてコロナ禍で何を学んだのか疑問を感じざるを得ないところもある。コロナ禍は望んで始まったものではなく突発した事態であり、ある種受動的に対応することになった面が大きいことも関係あるかもしれない。だが過ぎ去るのを待ち、終わったら元に戻すだけでよいと筆者は考えない。本稿を脱稿した 2024 年冬はマイコプラズマ肺炎とインフルエンザが流行し欠席する学生が多い。大勢の学生を教室に押し込みマイクで大声を出す授業のあり方が、新型コロナウイルスに限らず様々な感染症が広がる温床となっている可能性は高いであろう。

ローカルヒーロー活動についても同じ問いが立てられる。上述した様にローカルヒーロー活動が秘めて来た危険性が、今現在のステージショーやグリーティングにおいて強く意識されているとは言い難い。今一度往時を振り返り、学んだこと、活かせることを改めて模索する必要があるだろう。

先行研究で述べた通り、伝統行事の中にはコロナ禍でも工夫して、あるいは淡々と続けられた例がある。一方で、先行研究にて取り上げた仙台七夕まつりは、コロナ禍での工夫が現在も活かされる形で継続しており、示唆的である。コロナ禍での苦労をその場しのぎのものとせず、更なる発展につなげていく方が建設的といえる。少なくとも今後こうした危機的状況が再来しないとも限らない中で、コロナ禍の経験と工夫を学び継承し、その時に備えることは重要である。ローカルヒーローの活動においても、感染症対策、オンライン活動の充実、発信力を活かした啓発活動は、コロナ禍を経て実践的に学び、また平時も続けていくべきことだと考える。

## 5. 小 結

主に 2019～2021 年の時期に、ローカルヒーローを取り巻く厳しい状況下で実践した石井ゼミの活動を中心に論じた。コロナ禍を経て得られた学び、経験を残し、今後に備えていく必要を今強く感じている。「無いよりマシ作戦」がその役割を終えた今、得られた知見を活かして発展させる「転んでもただでは起きない作戦」を開始する時期であろう。ローカルヒーロー活動に留まらず、学校教育、さらに様々な日々の活動においても、何を学び今どれだけそれが活きているか、問いかける必要があるだろう。

## 謝 辞

本稿執筆に当たり、多くの方々からのご支援頂きました。特にコロナ禍での困難な状況下で直接支援頂いた方々に改めて御礼申し上げます（敬称略）。

新井浩文, 五十嵐真悟, 伊関友伸, 榎本勝美, 勝浦信幸, 佐藤秀樹, 白幡晶, 奈良博恵, 藤縄善朗, 松本明世, 渡辺沙織

アトレマルヒロ, 丸広百貨店川越店, ワカバウォーク

### 参考文献

- 朝日新聞デジタル (2023)「青森ねぶたと弘前さくらまつり コロナ禍前と同内容で開催へ」2023年3月14日 11時00分  
<https://www.asahi.com/articles/ASR3F72Q8R3FULUC018.html#:~:text=%E3%81%AD%E3%81%B6%E3%81%9F%E7%A5%AD%E3%81%AF%E3%80%81%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E7%A6%8D,%E4%B8%87%E4%BA%BA%E3%81%A74%E5%89%B2%E3%80%82> (閲覧日 2024年2月6日))
- 安藤直子 (2022)「新型コロナウイルス禍における東北地方の都市祭礼の継承とその戦略——仙台七夕まつりを事例として——」『東北福祉大学研究紀要』47: 19-37
- 石井龍太 (2015)「多様化するローカルヒーローの認識と実態」,『城西大学経営紀要』11: 109-132
- 石井龍太 (2016)「ローカルヒーローのステージショーに関する現状分析」『城西大学経営紀要』(12): 127-144
- 石井龍太 (2017)「ローカルヒーローによる教育実践の検証: 城西大学経営学部石井龍太ゼミナールの事例から」『城西大学経営紀要』(13): 115-143
- 石井龍太 (2020a)「《手作りマスク頒布作戦》～あるローカルヒーローの精いっぱい取り組み～【城西大学 経営学部】」『城西大学 HP』※リンク切れ
- 石井龍太 (2020b)「《第2回「無いよりマシ」作戦》～あるローカルヒーローの精いっぱい取り組み～【城西大学 経営学部】」『城西大学 HP』(<https://www.josai.ac.jp/archive/news/20200407-02.html> (閲覧日 2024年2月9日))
- 石井龍太 (2023)「仮面文化としてのローカルヒーローによる教育実践」『わたしたちのリベラルアーツ: 城西のできる多様な学び』: 142-157
- 一般社団法人マツリズム・日本財団「海と日本プロジェクト」(2021)「コロナ禍における祭・海の祭調査レポート」  
<https://www.matsurism.com/wp-content/uploads/2021/04/%E6%B5%B7%E3%81%AE%E7%A5%AD%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%83%AC%E3%83%9B%E3%82%9A%EF%BC%88%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%83%98%E3%82%9A%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%99%E5%90%91%E3%81%91%E7%BC%89.pdf> (閲覧日 2024年2月29日))
- 犬山明彦・杉元政光 (2012)『ゆるキャラ論 ゆるくない「ゆるキャラ」の実態』ボイジャー
- 岩崎雅美 (2008)「コミュニティ・ソーシャルワーカーの養成課程における「実践力」のとらえ方について ～市場原理に与しないローカル・ヒーローに関する考察から～」,『上智社会福祉専門学校紀要』3: 63-70
- 大倉真人 (2014)「「社会人基礎力」育成のための教育プログラム——「ゆるキャラ作成」を題材として——」『経営と経済』94 (1-2): 41-56
- 金井壽宏, 高橋潔 (2004)『組織行動の考え方 ひとを活かし組織力を高める9つのキーコンセプト』東洋経済新報社
- 厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策本部 (2023)『新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後の対応について (周知広報)』<https://www.mhlw.go.jp/content/001094136.pdf> (閲覧日 2025年1月13日)
- 佐々木裕道 (2021)「コロナ禍における無形の民俗文化財の現状と課題」『無形文化遺産研究報告』15, 東

京文化財研究所：13-24

参議院 (2021) 「「不要不急の外出・移動」の定義と解釈に関する質問主意書」

(<https://www.sangiin.go.jp/japanese/joho1/kousei/syuisyo/204/syuh/s204008.htm> (閲覧日 2024 年 2 月 19 日))

城西大学経営学部石井龍太研究室 (2016a) 「ローカルヒーロー通信」(1)

城西大学経営学部石井龍太研究室 (2016b) 「ローカルヒーロー通信」(2)

城西大学経営学部石井龍太研究室 (2017) 『ローカルヒーロー通信』(3)

城西大学経営学部石井ゼミ (2020a) 『リヴァイザー J』第 5 話「キミの名は」

(<https://youtu.be/MStWhPPuWzA?si=-8khoGgH4gTos2tn> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020b) 『リヴァイザー J』第 6 話「着信…あれ？」

([https://youtu.be/2UTe9Itm6BA?si=CNHiKiRLvg8\\_dqbn](https://youtu.be/2UTe9Itm6BA?si=CNHiKiRLvg8_dqbn) (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020c) 『衛生啓発動画「4 つのきほんをぶきにしろ。」ロウロウ編』

(<https://youtu.be/l8Z2aR8GF-o?si=4wxUaw6c1kav62KW> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020d) 『衛生啓発動画「4 つのきほんをぶきにしろ。」ロウロウ・鉄忍者編』

(<https://youtu.be/nUMers37frU?si=NPwIthNCex8Bs0dk> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020e) 『リヴァイザー J in 17 号館施設紹介【全編】』

([https://youtu.be/klz\\_vAJZFEU?si=g905RJzYFO-fuHl](https://youtu.be/klz_vAJZFEU?si=g905RJzYFO-fuHl) (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020f) 『リヴァイザー J in 17 号館施設紹介【1 F】』

(<https://youtu.be/9SetzI2iOvM?si=V9omtg3qZ9rV6GAb> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020g) 『リヴァイザー J in 17 号館施設紹介【2 F】』

(<https://youtu.be/PIdTbCiplF0?si=8-1WRuFTgkEVMwHT> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020h) 『リヴァイザー J in 17 号館施設紹介【3 F】』

(<https://youtu.be/6mLqluJ6DEM?si=ZuEuWyHr1JFdCQXM> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020i) 『リヴァイザー J in 17 号館施設紹介【4 F】』

(<https://youtu.be/bur-XqsuEtk?si=WXXmNDA8lF4UikpR> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020j) 『リヴァイザー J in 17 号館施設紹介【5 F】』

(<https://youtu.be/ftS0DbilAVs?si=LLlVKXM5drDoQUHq> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2020j) 『17 号館紹介動画 Short Version 200612【#城西大学】』

([https://youtu.be/81wDWzkNY9U?si=llmECqnd4P4\\_BawD](https://youtu.be/81wDWzkNY9U?si=llmECqnd4P4_BawD) (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2021b) 『リジェネイダー J』第 2 話「雷親父』

(<https://youtu.be/RkQyrOyZFBw?si=4s9ostnGl7Su8Cmi> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2021c) 『高麗戦士トライ』第 12 話「高麗の戦士」

(<https://youtu.be/9KhU6pVbY9w?si=YGTGnPTBghDrbdYb> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2021d) 『リジェネイダー J』第 4 話「偽りの真実」

(<https://youtu.be/z0yxSGU-FRw?si=22UUZAODAM8L6wSu> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2021e) 『リジェネイダー J』第 5 話「武装蜂起」

(<https://youtu.be/YyAaJVXfTYg?si=uAh10Z8k-rkYnima> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2021f) 『リジェネイダー J』第 6 話「反撃開始」

([https://youtu.be/SHbAnxLzCpl?si=-s0KPSDov\\_k4auyL](https://youtu.be/SHbAnxLzCpl?si=-s0KPSDov_k4auyL) (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2021g) 『リジェネイダー J』第 0-1 話「ある晴れた日のこと」

(<https://youtu.be/NIEa8Asd0Uc?si=pYndJ8pUF3tF9RXZ> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

城西大学経営学部石井ゼミ (2021h) 『高麗戦士トライ』

(<https://youtu.be/iaSOfHrKGAU?si=NPcQt5SG1eG79IXz> (閲覧日 2024 年 2 月 15 日))

スラちゃんねる ASSEMBLE〜リアルライフヒーロー (2020) 「【フル ver】 コロナに負けない絆の力〜応援メッセージ動画！コロナに負けるな！頑張ろう日本!!〜リアルライフヒーロー，ローカルヒーロー，ゆるキャラ大集合!!」

([https://www.youtube.com/watch?v=4Qj63PISA\\_U](https://www.youtube.com/watch?v=4Qj63PISA_U) (最終閲覧日 2024 年 4 月 1 日))

地域戦隊カッセイカマン (2021) 『地域戦隊カッセイカマンの『ローカルヒーロー大放送』チャンネル』

([https://www.youtube.com/channel/UCsgAk\\_AEUhCjrMbd\\_XRQNkQ?app=desktop](https://www.youtube.com/channel/UCsgAk_AEUhCjrMbd_XRQNkQ?app=desktop) (閲覧日 2024 年 2 月 9 日))

博神バリスガー『博神バリスガー』HP

(<https://herofukuoka.jimdofree.com/> (閲覧日 2024 年 2 月 6 日))

ブルー・オレンジ・スタジアム (2006) 『ローカルヒーロー大図鑑』水曜社

水野博介 (2012) 「都市メディア論(9) 地方都市の新たなシンボルづくり：「ゆるキャラ」などの意味や意義」『埼玉大学紀要. 教養学部』48 (2)：211-218

目白大学メディア学部平山秀昭ゼミ (2020) 『インカレオンラインイベント「Beyond〜ニューノーマル時代の Well-being を創造する〜」』

(<https://www.youtube.com/live/qPmQSJPuiMU?si=GmvE6JOHxsyncZCnS> (閲覧日 2024 年 2 月 9 日))

文科省 (2021) 『令和 2 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』

矢島妙子 (2013) 「地域文化の体現と展開」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』2013 (0), 129

矢島妙子 (2014) 「地域文化表象の展開の分析」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』2014 (0), 107

山本博士 (2023) 『ハカセのこうしゃっぺえ話 ― ヒーローは人間の生命に寄りそう ―』アスバラ社

養老孟子 (2020) 「私の人生，「不要不急」？ 再考した問い 養老孟司さん」『朝日新聞』2020 年 5 月 12 日

読売新聞 (2021) 「不要不急と不可欠と不条理と」2021 年 10 月 29 日

(<https://www.yomiuri.co.jp/choken/kijironko/ckmedical/20211027-OYT8T50062/> (閲覧日 2024 年 2 月 19 日))

ローカルヒーロー研究会 (2013) 『超ローカルヒーロー大図鑑』水曜社

NHK (2020) 「キッチンペーパーで簡易マスクをつくろう」

([https://www3.nhk.or.jp/news/contents/bousai\\_tips/cont08.html](https://www3.nhk.or.jp/news/contents/bousai_tips/cont08.html) (閲覧日 2024 年 2 月 6 日))

NHK NEWSWEB (2022) 「不要不急ってなんだろう」

(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220118/k10013430381000.html> (閲覧日 2024 年 2 月 19 日))

## Local hero activities during the coronavirus pandemic

Ishii Ryota

### **Abstract**

Local heroes, a type of regional character, have been greatly affected by the coronavirus pandemic that has spread around the world since the winter of 2019. While it became difficult to carry out activities as usual, there were some cases in which participants took on new challenges. This note introduces the challenges of local heroes during the coronavirus pandemic. We will also report on the activities carried out by the Ishii Seminar, Faculty of Business Administration, Josai University.

**Keywords:** local heroes, coronavirus pandemic